四方義子

四

遠
1.433
4

遠
1439
4

四方義草巻之12

石部孫太郎塚を築法

部陵ある大江の近辺に名相長雄と名乗る
家あり百年前迄も世継なし女子一人
ありて民子と云ふ吹弾絃竹初より能し天然
の美形に新貌を加へて艶麗なり部の醫
院の男子甲斐陀親と云ふ者と懇交豊なる
動むに人あり名雄云未だ人となりはこれ孫八郎
し只何となく我欲に富と知らず淫婦あるは
可若も初め免婚姻の縁八一統親族より迎撰へ

ばくさに張騫より甲斐陀ふ若競べより大志を
吾雄の河云海面のりとも者ふ流ひ与羽の飯く
来る民子ハ生民ハ云人ものら熟賢人競ら風流
に溺影ふ去情義ー働きを奪人意情のれ
をむさ自暗を見生流とく競ふ但民のろひ
をふー動止に情と合む競も省く心なけを
と吾雄夫婦の用思く色を貪らの性ふ孫ハ
国房と寂寞ー有ー すてく初なのおのこり
愈れする彩へくくもまいいおむ民子ハいさを
身の雲隠をも独の下に張枕ふはふ

秋不覚暗のかくもかく沖の心を見飛波ふけく
張つくんとあとゆるる面の流柳ふ琴ー よなこと君
とあさめら付元仲指に八指てふ藤棚の風け
調子と雲井ふ建暴くからる琴声徴のみくら
く低く張ふ優に舞光の曲とつへ今てるるふの
端ふいくる夜も人らてふ孫霞間ハ流の測と
なると風ひ心ふ競ら年強さとくらまる操
ふーく孫や八流の測とあると暁をくしく
競の方を月色民子ら情合糟ひ元ふ濡れ
色燥のさくら鄭ふ杉をかくらくらけく

よしあしは只ひとつのめくらく仰長の撰判し
二つなきの藻てりを読みてんは源国と號し
つひに宮家の紋も我家のまゝなりし淡公の
謙虚なれて流布せきまもめ枯んと賜つけく
辰もいまも実をひに縁母よ若く相し甲斐況
庵によみかゝぬ狼籍の末鋭の世嗣と語し給
ふよくいふ筆雲がなる音を讓りも寄若は奴僕に
瞬のて猶なるといふなる源国に有ろ遷し剣へ
中古方の人なるも杉それは琴曲にまかせて魔
籠に戯のよいまそゝ中古方を替ゆる名朝帽

の嬢ハいの井の狼藉ありんと計なりしきこと
しけ小云ちゝさたまも偏執ハ柳子の清味沓
を婦ハ鬼嘔の人みて心主の煙狗ほ蔑あはれ
ゆゑくん曲るを婦女売に云合ひし抔よ云ともやす
所に金を清すくひ若維もそしめらるに耳に
のけさゝも斬に月よつ半謀つ支梅正行
ことさら帝代の名将すら林落を伏せと木
それし車もひつましく肉眼とや絶り破縁
せんと心語ゆ甲斐院あくもまるをと聴しなほに
緑組不熟して都に侮りは不容の災ひしも乱

うしとん遅ひ友あり石邪の孫たるを人今
語る石邪性雪小強を押弱を敵ふおのこうん
八幡つ汗く云ふ下賤小民子を強くあまれ
のまかの強し強し新も見せし若雄不仁か
ア人面あり悔へし新てる限ふもなん
競辯したるひまに完るの車たるもも
不義小せしおのれら不興を悔るにきて人と
黒人まし八孔ともえのう石邪憤く云下時
勢小疎し用の武王殷を報ず孟子ふ
とうまん再三再江甲斐陀指頭をもうるを

ふく止ふく祝融氏に家門を焼きてるを強
戾を接は破侯を拾ふうと歎してもうは
見下を遅を祈る祈も毋誅わ八疑あうん
競見に弱い後毋とあく漢の令民雄指揮に
詣石邪今八易しく若雄小居くつ人を責
若雄河ふく法の況書く謝八一月を詐く
競波板し破孫八元ちの見悟ふく石邪の
猛氣も信ちう郎ふるを八再ひ拾ふも吸らん
石邪の詩小ふく後江の時言と汗る若雄を
甲斐陀の遅才の日ち民ふう動止面小笑

他さて次第に宮拾眼うるみて床に引倒れ
新の涙と競のあるに心よりんをや美貌の
顔恵もあらんと思ふ暫と撰氏るハいよ〳〵伏
流又母の何も背をそむきまゝ甲斐泥を流
す○一月巻と探のみつゝ涙へう絲後玉とつ
らねさ作ふ対まるぬ乳母ゐるこ作ふ絲
の涙にきるを巻く流く競ふ流さハ相も氏子
此涙をと流りの あしゝはと花のりに
拭さらしさ改をあけく玉の緒もきいも
と見めらてあゝ時く雲と流ハ見恨ふて

ゐひ色青ゐけさ見ふさる　あり我ゐふ田髭
流ふふ作へよ不孝にて中遂ふ引まきゐ
いまハ誰さゐ恨んゐはら心と嫌さゐて落る色
に史師の絵と絵ひのゐ百年苔下に蓮葉
表まゐゐ侍苔もん見のみを遂ふまに
見ひおしゐ中もあゝは我さゐんゐのもと
うしと梅沼の琴ゐ流一双とをゐるつゐゐみけ
らさも形人と見ひんひのへうと絵冊を流く流
は競面墓の流面のゐく絵冊をふゐんれハ
云の墨ハ出し絵し弟のうさと

杉もへは濁るゝ純なるゝ
甲斐沈夏なれども幼なかさのあくおのと曲なる
さ孝逸ふるゝ一女子を法門と名乗と頼し
藤髮曉蓮一底岳とみつゝあるゝ氷に
鬼紋付古郭も民ゝ探をあるれる涼て夜よ
月出掬へ毋ゝ街乃の橋ゝ彼琴ゝ流と橋ゝ三蓮
の石畔と建探女民ゝ塚と洗ゝ黄門家ゝ
乃美逸ふるふやゝ門の伏ゝ流ゝ宮塚と
畔ハ岩むゝ塚と宮塚ゝも今名世と
徒家の人とゝ神を高らゝ

阿波義祐奇怪小過法

昔日阿智光秀激田の又子と害せられ罪は海小
不宮ゝ橋小放ゝ流ゝ瀬ゝも余流と屠ゝん
と殺家の命とゝ光義のお城放ゝ
む寄手の中池田種政の被官阿波丹内
義祐といふ者一書ふのゝ名をかけ書ゝ
穢ゝ陳宮と離ゝ城の坂下て思びゝ
まつ城ゝ明智ゝ光秀ゝ矢任八十分小寄ゝを
ゝまさんゝ心と敵ゝ敵対の思びやゝ
自刎夜ゝ

に撰の下ふ武者一騎ありて推し寄せ
河波ハ後ろしとんひ返ものもなきを
勝げふ遣せば一面の交ある河波界内石高ろ
支任指ふ伸よりそこに流りるハ河波殿と
ゑんくんそこ目ら形いかたる所支任ある後紙
ゑるゆかう出めへ高流高ふあり是下の死ハ
我指ふよかる藤忽ハあるしといハ河波も思ふに
羅しとんひいるやの智度ゆんと言ふ言ふ所
云ふ下ふと静くおのまゑ詞と伏我むりは
の智度と主殿の紙してよ生死と伏ふ

く彩の形ふ陸ふくいる時ハ行るふ敵と強
力に血ふぐ強と撃ふ墨と碑ふ矢石とおりと
車敵ふ敵ふ正ふ一城の古後ふるる矢の
一度ハ誰ふ敵しも思ひいるる主ふ一度
不義の指名ふのふ下つるおのまふ
天地の愛ふうけ死と寝の死ふ一百度のる
ふふ度の勇功もみる函親ふ敵者ハふを
かふ勇者功とふまふ言ふの下ふくる
べふ敵おのまハ撃ふ死して知過の恩を
蹴ん是下ふ蓋世の名石あり古の日一お

の肩かつぐ百日の業労も一朝の楽と成へし
実小智者の所為なるべしおのれと導て
法東永久を求まと一封黄金二百斤を授る
小伝説河波の稲津小徳一文々まこと
仕を締古に紀加の海より武器と兵器に換も
交易まとる小稲荷大麦ならう布米まと
糸の價下中年のふ禅と変化と角くく
くく三年きつ内ひのみと義中をし
ならりぬ扨く小徳小国と窮んと又ひ
外国に交易せんと発船多く蓋交趾へ渡

小船に棲迅風に友細解帆を張くさら義
と日列の異白る葛高石山の瀧と知る高八海
測さ絶へ切岸実出し岩八屋風と立ちごく
樹木繁茂し数株の松八海風よりまもく広甲
根をわるる絶も及ど黒田雅の糸みんと誘法
頭の間に立てる小雲代を織と変じ風の如ち
に福唱と一変の神明狂風紅を吹頻り帆を小
撃ちとく龍筋舟を倒逆と空中へ飛ぶ
鯨の急揚ごとく急きの松ら枝と掛るよ
たる巌雲を穿く蓬下八津くたる白波と

聽く船ら漂船ハ流るゝ間よ流れ分れ流ふ間
たゝと漸眼さぶめくゝ人まで救上つゝ
ゝ蔵
ゝ変そるゝくゝ中ゝ由ゝ者の相翼と主新横
く殺沼ゝみし光あん鷲れ巣ゝと
巣しゝく空中ゝ一個の荒鷲相ゝ
鷲ひ河渡を喰ゝ
伸し鷲と頂と摘ゝ右のゝ草ゝ
して刑金味の利武の振陳ゝ鷲ゝ
流に籠ゝ海ゝ見摘ゝ死ゝ杵日列ゝ
椎茸の石物ゝ一國の百性揮ゝ業ゝ

此日鷲の呼ぶと第ゝ百性数百人おもゝ人々
ゝ殺ゝと云ゝ沼ゝ綱ゝ出し蔵ゝ
ゝ沼ゝ
ゝ人ゝ
ハ椎茸の名産ゝ岩の樹ゝ
ゝ山の麓ゝハ曲折樹木蔵ゝ
南面ハ海ゝ吹暗日の恵も強く草の雲大
ゝ幸ゝ不ゝ
ゝ
ゝ大人ゝ

謝せるものとちくびに幸あらばれんとこゝに於て
詩歌を高吟ひあらう枝こゝび帯肩の疑ふ
過幸ふして一命を全るのこゝろ古に
て独り再び業を決せんとするの心情有
鷲の巣ふあるものの羽根を拾ふ玄蕃ふせんと
他ふ見くさびてんや星人ふ見よう宮
事やあるこゝ武しして然るに奔るなんとも毎ハ
捉く巣とおろふものの羽根数年積て
るもの山のごとく河波指揮しく作るハよ為
山ろ雑る磨鷲の羽翼ろこゝ玄ふ殺りを

バ敵個の強者に拾へ引ずしく於ふ也る時
ハ流一流其武術の世とるう國この法度今
るを功えう流を切ふ流士数おとう
しく武を磨く鷲の尾る刷う矢をくム
バ的元三ぢふ刻る山ものの矢八風高刻
流ひく鏡と吾雄雑八日に映し金光所で
るんと数寄ふ達る時ハ阿波指ふ羽根頃
と論せびてのもるうに一羽も法らびふ金集
る龍林の一計早しく的ひ二度回を求めく
る孫のこゝり事とるんたる矢ぐ死を為ん

く紫野なる檻列和尚ふだくし之侍ぶ迦納
と宮いまふ大徒寺小沼宮の於ゐ久新緑
の祠堂ゑり俗説つくり的看之義旅生ふ
ゆと伝ふ就祢の子孫八国傍ふ俗し河波
河菜とく連綿たり

江方義草巻之注